『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（7）

澤　田　　稔

富山大学人文学部紀要第 67 号抜刷
２０１７年８月

『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（7）

澤　田　　稔

はじめに

本訳注は『富山大学人文学部紀要』第 66 号（2017 年 2 月）掲載の「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（6）」の続編であり，日本語訳する範囲は底本（D126 写本）の p. 165 / fol. 83a の 1 行目から p. 199 / fol. 100a の 20 行目までである。

前号で訳出されたように，カシュガル・ホージャ家イスハーク派の軍隊はウシュにおいて，同家アーファーク派のホージャ・ブルハーン・アッディーン側の軍勢に敗れ，さらにカシュガル城市も奪われた。カシュガルにおいて「統治の王座」に就いたホージャ・ブルハーン・アッディーンは，軍勢とともにイスハーク派の最後の牙城，ヤルカンドへ向かった。そして，ヤルカンド城市において両軍の戦いが始まった。本号では，イスハーク派のホージャ・ジャハーンを長とするヤルカンド陣営の内部状況を中心として，ヤルカンド城市の攻防をめぐる両勢力の和戦両様の動向と，イスハーク派側の敗北が語られる。

日本語訳注

【p. 165 / fol. 83a】さて，語り手は次のように物語る [1]。

この戦い [2] から戻って，ホージャ・ブルハーン・アッディーン・アズィーズは統治の王座に坐り，右手（oŋ qol）にアブド・アルワッハーブ・ベグ（‘Abd al-Wahhāb [3] Beg），その弟ウマル・ベグ（‘Umar Beg），その息子 [4] アブドゥ・サッタール・ベグ（‘Abdū Sattār Beg），アブドゥ・ハーリク・ベグ（‘Abdū Ḫāliq [5] Beg），クチャー（Kūčār）のハーキム，アッラー・クリ・ベグ

1) Ammā rāwī andaġ riwāyat qīlurlar kim。Or. 9660, fol. 93b は「物語の章。聞かねばならない（Faṣl-i dāstān. İšitmäk keräk）」と記す。
2) 本書【p. 160 / fol. 80b】「日本語訳注（6）」77 頁～【p. 162 / fol. 81b】「日本語訳注（6）」79 頁で叙述されたヤルカンド城外における戦いを指しているのであろう。
3) Or. 9660, fol. 93b; Or. 9662, fol. 108b は ‘Abd Wahhāb (‘BD VHAB) と記す。
4) アブド・アルワッハーブ・ベグの息子という意味である（本書【p. 134 / fol. 67b】「日本語訳注（6）」57 頁の注 18 参照）。
5) Or. 9660, fol. 93b は ‘Abd Ḫāliq と記す。

(Allāh Qulï Beg)，フダー・ベルディ・ベグ（Ḫudā Berdi Beg）[6]，ムハンマド・ヤール・ベグ（Muḥammad [7] Yār Beg)，サイラムのハーキム，アリー・ベグ（‘Alī Beg)，ドーラーン（Dōlān）のハーキム，サアーダト・ベグ（Sa‘ādat Beg)，ウシュのハーキム，ホージャ・スィー・ベグ（Ḫōja Sī Beg)，その息子ムザッファル・ベグ（Muẓaffar Beg)，タグリク（「山地人」）集団のベグたちのうち（Taġlïq gurūh begläridin)，ラフマーン・クリ・ベグ（Raḥmān Qulï Beg)，ファルマーン・クリ・ベグ（Farmān Qulï Beg)，アブドゥ・ラヒーム・ベグ（‘Abdū Raḥīm [8] Beg)，クルグズのアブド・アッラー・ベグ（Qïrġïz ‘Abd Allāh Beg)，左手（sol qol）[9] にシール・ムハンマド・エミーン〔・ベグ〕（Šīr [10] Muḥammad Emīn [Beg] [11])，その息子アブドゥ・ラフマーン・ベグ（‘Abdū Raḥmān Beg）[12]，ユースフ・ベグ（Yūsuf Beg)，ムーサー・ベグ（Mūsā Beg)，ムハッラム・ベグ（Muḥarram [13] Beg)，ニヤーズ・ベグ（Niyāz Beg)，〔カシュガルの〕[14] イシク・アガ，フダー・ヤール・ベグ（Ḫudā Yār Beg）〔の息子〕[15]，ムハンマド・エミーン・ベグ（Muḥammad Emīn Beg)，カルガリク（Qārġālīq）のハーキム，ミール・ニヤーズ・ベグ（Mīr Niyāz Beg)，その息子ミール・アワズ・ベグ（Mīr ‘Awaḍ Beg）[16]，中央（orta）にトロムタイ大人（Tōrōm-tāy Dārīn)，ダンジン・ジャイサン（Dānjīn Jaysaŋ)，アーホンたちのうち，ムッラー・クトゥルグ・アーホン（Mullā Qūtlūġ Āḫvun)，ムッラー・バラート・アーホン（Mullā Barāt Āḫvun)，サカル・アーホン（Saqāl Āḫvun)，ムッラー・アワズ・アーホン（Mullā ‘Awaḍ Āḫvun)，ムッラー・カラム（Mullā Qalam)，ムッラー・ナウルーズ・ガザナチ（Mullā Navrūz Ġazānčī)，サリク・ヤサウル（Sarīq [17] Yasāvul)，イリヤース・ミールザー（Ilyās Mīrzā）[18]，スーフィーたちのうち，ムー

---

6) D126; Or. 9662, fol. 108b は「クチャーのハーキム，フダー・ベルディ・ベグ，アッラー・クリ・ベグ」と記すが，Or. 9660, fol. 93b により順番を逆にする。本書【p. 134 / fol. 67b】「日本語訳注（6）」57 頁によると，クチャーのハーキムはアッラー・クリ・ベグである。

7) Or. 9660, fol. 93b は Muḥammad ではなく，Mämät (<MMT) と記す。

8) Or. 9662, fol. 108b は ‘Abd al-Raḥīm と記す。

9) D126 は SVL QVLY と綴るが，Or. 9660, fol. 93b の SVL QVL による。

10) D126 は ŠRH と綴るが，Or. 9662, fol. 108b の ŠYR による。

11) Or. 9660, fol. 93b; Or. 9662, fol. 108b による補遺。

12) Or. 9660, fol. 94a は ‘Abd Raḥmān Beg，Or. 9662, fol. 108b は ‘Abd al-Raḥmān Beg と記す。

13) D126; Or. 9660, fol. 94a は MHRM と綴るが，Or. 9662, fol. 108b の MḤRM による。

14) Or. 9662, fol. 109a による補遺。

15) -niŋ oġlï。 Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a による補遺。

16) 本書【p. 128 / fol. 64b】「日本語訳注（5）」40 頁では「カルガリクのハーキム，ミール・アワズ・ベグ，〔その息子ミール・ニヤーズ・ベグ（Mīr Niyāz Beg）〕」と記されているが，【p. 141 / fol. 71a】「日本語訳注（6）」63 頁では「カルガリクのハーキム，ミール・ニヤーズ・ベグの息子ミール・アワズ・ベグ」，【p. 143 / fol. 72a】「日本語訳注（6）」64 頁では「カルガリクのハーキム，ミール・ニヤーズ・ベグ」と記されている。

17) D126; Or. 9660, fol. 94a は SRYQ，Or. 9662, fol. 109a は SRYĠ と綴る。

18) Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a は Ilyās Mīrāḫūr と記す。

ンディー・スーフィー（Mūndī Ṣūfī），ラフマティー・スーフィー（Raḥmatī Ṣūfī），ラーナティー・スーフィー（La‘natī Ṣūfī）[19]，ニヤーズ・スーフィー（Niyāz Ṣūfī），クルグズたちのうち，クバード・ミールザー（Qubād Mīrzā），ハキーム・ミールザー（Ḥakīm [20] Mīrzā），〔ウマル・ミールザー（‘Umar Mīrzā）〕[21]，スーフィー・ミールザー（Ṣūfī Mīrzā），一群の従者たち（jam‘-i ta‘alluqāt）が坐り，次のように相談した。すなわち，「ヤルカンドをどのようにして取ることができるのか。戦うならば，勝利は我々のものとなる。〔しかし〕城市に〔近づいて〕[22] 行くと，〔ヤルカンド側は〕射撃し，決して接近させない」と言った。皆は堂々と身をまかせ（taslīm-i šāhāna qīlīp），次のように言った。すなわち，「こちら側から〔使者を〕[23]〔城市に〕**【p. 166 / fol. 83b】**入れるならば，中国人（Ḫïṭāy）から二人の者，カルマクから二人の者を加え，一人の良い人が使者となり入るならば，ヤルカンドのホージャたちはカルマクの壮麗さを見て打ちのめされ，中国〔軍〕[24] の堅固さを知る。おそらく，この使者の〔書状の〕[25] 懲らしめ（siyāsat）を恐れ [26]，我々の前に出てくるだろう。あるいは，城市を投げ出して，難を避けるだろう」と相談した。皆はこの得策を〔道理にかなっている〕[27] と見なした。

まさにその時，〔使者は〕懲らしめの念のこもった [28] 書状を整え，ムッラー・バーキー・サルタラーシュ（Mullā Bāqī Sartarāš）に二人の中国人，二人のカルマク，幾人かのタグリクを同行させ，城市の門の前に来て使者であることを通知し，ホージャムの許可 [29] を得て城市に入り，〔ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下の〕[30] オルダ（宮廷）の前に来た。オルダのアミールたちはこの者たちを軽蔑し，仕切り（dar-band）ごとに床に接吻させ，ホージャムの御前に連れてきた。この使者たちはホージャムの壮麗さ，・・・[31] を見て驚いていた。一時のち，正気に戻り次のような〔光景を〕見た。すなわち，ホージャム猊下〔ホージャ・ジャハーン・ホージャ

19) Or. 9660, fol. 94a は Qarā Ṣūfī と記す。
20) D126 は ḤKM と綴るが，Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a の ḪKYM による。
21) Or. 9660, fol. 94a による補遺。
22) yaqïn。Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a による補遺。
23) älči。Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a による補遺。
24) laškari。Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a による補遺。
25) nāmasiniŋ。Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a による補遺。
26) qorqup。D126 は QVQVB と綴るが，Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109a の QVRQVB による。
27) ma‘qūl。Or. 9660, fol. 94a; Or. 9662, fol. 109b による補遺。
28) siyāsat āmīz。D126 は āmīz を AMYR と綴るが，Or. 9660, fol. 94a の ĀMYZ による。
29) ruḫṣat。D126 は RVḪṢT と綴るが，Or. 9660, fol. 94b; Or. 9662, fol. 109b の RḪṢT による。
30) Ḥaḍrat-i Ḫvāja Jahān Ḫvājam。Or. 9660, fol. 94b; Cf. Or. 9662, fol. 109b による補遺。
31) ‘Ṣ‘ṢH。この語の読みと意味を解し得ない。

ム猊下〕[32] が高い王座に坐っている。その右手に，聖法を与える人の普及（rawāj [33]-i dihanda-yi šarī‘at），ヤルカンドのアーラム（a‘lam，最上位の学者）〔すなわち〕ウマル・バーキー・アーホン（‘Umar Bāqī Āḫvun），ハージー・アブド・アッラー・アーホン（Ḥājī ‘Abd Allāh Āḫvun），ハージー・ウバイド・アッラー・アーホン（Ḥājī ‘Ubayd Allāh Āḫvun），シャー・アブド・アルカーディル・アーホン（Šāh ‘Abd al-Qādir Āḫvun），ハージー・サーリフ・アーホン（Ḥājī Ṣāliḥ Āḫvun）をはじめ全てのウラマーたちが坐っている。左手にヤルカンドのハーキム，ガーズィー・ベグ，イシク・アガのニヤーズ・ベグ，ウマル・ベグ，**【p. 167 / fol. 84a】**シャー・ヤクーブ〔・ベグ〕[34] をはじめ全てのアミールたち，カシュガルからアブド・アッラー・ホージャムとともに来たオパル出身の [35] ニヤーズ・ベグ，ミールザー・カースィム・ベグ，ミールザー・ムラード・ベグ，ミールザー・シールダーグ・ベグ，そしてまたミーラーブ（水利官），ミン・ベギ（百人長）たち（mīrāb miŋ begilär）が代理人（jā-nišīn）となり，坐っている。中央でソファ（nīm-taḫt）[36] に王子（šahzāda）たち，すなわち，その名前はホージャ・アブド・アッラー・ホージャム，ムーミン・ホージャム，エルケ・ホージャム [37]，ヤフヤー・ホージャム [38]，ホージャ・ジャハーン・ホージャムの息子スィッディーク・ホージャム，その娘婿ウマル・ホージャム [39]，〔イナーヤト・ホージャム（‘Ināyat Ḫvājam）〕[40]，〔親戚の〕[41] スーフィー・ホージャム [42]，ナスル・アッラー・ホージャム（Naṣr Allāh Ḫōjam）〔が坐っている〕。一列後ろに（bir ṣaff kīn）アワズ・ハリーファ（‘Awaḍ Ḫalīfa），アブド・アルラフマーン・ハリーファ（‘Abd al-Raḥmān Ḫalīfa），サーリフ・ハリーファ

---

32) Ḥaḍrat-i Ḫvāja Jahān Ḫvājam。Or. 9660, fol. 94b による補遺。

33) D126 は ARVAḪ と綴るが，Or. 9660, fol. 94b; Or. 9662, fol. 109b の RVAJ による。

34) Beg。Or. 9660, fol. 94b; Or. 9662, fol. 109b による補遺。

35) Ōfāldïn。D126 は AVFAL と綴るが，Or. 9660, fol. 94b の AVFALDYN による。オパルはカシュガル城市から西南西およそ 46km に位置する町（Opal Bazar）。Sven Hedin, *Central Asia Atlas* (The Sino-Swedish Expedition, Publication 47, I. Geography, 1), Stockholm: Statens Etnografiska Museum, 1966, NJ43 の地図参照。

36) D126 は nīm を NM と綴るが，Or. 9662, fol. 110a の NYM による。

37) ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム，ムーミン・ホージャム，エルケ・ホージャムは，ホージャ・ジャハーンの弟ユースフ・ホージャムの息子たちである（本書【p. 69 / fol. 35a】「日本語訳注（3）」48-49 頁参照）。

38) ヤフヤー・ホージャムはホージャ・ジャハーンの末弟ホージャ・アブド・アッラーの息子である（本書【p. 65 / fol. 33a】「日本語訳注（3）」44 頁参照）。

39) ウマル・ホージャムはホージャ・ジャハーンの娘婿である（本書【p. 110 / fol. 55b】「日本語訳注（5）」23 頁参照）

40) Or. 9660, fol. 94b; Or. 9662, fol. 110a による補遺。イナーヤト・ホージャムはホージャ・ジャハーンの娘婿である（本書【p. 159 / fol. 80a】「日本語訳注（6）」76 頁参照）。

41) ḫvīšlardïn。Or. 9660, fol. 95a による補遺。

42) スーフィー・ホージャムはホージャ・ジャハーンの娘婿である（本書【p. 130 / fol. 65b】「日本語訳注（5）」41 頁，注 114 参照）。

（Ṣāliḥ Ḫalīfa），ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウル，シハーブ・アッディーン・ブカーウル，フラト・コズ・ケレクヤラグ（Fulat Qozï Keräk-yaraġ）[43]，〔サービル・ケレクヤラグ（Ṣābir Keräk-[ya]raġ）〕[44]，ダルヴィーシュ・ブカーウル，ホージャシュ・ホージャ（Ḫōjaš[45] Ḫōja），ホージャム・ナザル・ホージャ（Ḫōjam Naẓar Ḫōja），アルース・ミールザー（‘Arūs Mīrzā），トゥーカール・ミールザー（Tūqāl Mīrzā）[46]，トゥルスン・カシュカ（Tūrsūn Qāšqa），ホタンからのシャー・ズィヤードゥーン・ハリーファ（Šāh Ziyādūn Ḫalīfa），ホージャ・ラーク・ハリーファ（Ḫōja Lāq Ḫalīfa），トフタ・ホージャ（Tōḫta Ḫōja），アク・ブルト（Aq Būrūt），それ以外に騎兵随員（ḫayl ḥašam）がそれぞれ所定の位置にいる（jā ba-jā turup durlar）。

さて，この使者たちは数回，敷居に口をつけ，地面に口をつけ（ひれ伏して），完全に怖気づいて頭から書面を取り出した。ホージャム猊下の指図により書記が書状を取り，流暢に大きな声で読んだ。その内容は次のとおり。すなわち，「おお，ホージャ・ジャハーン・ホージャよ，ヤルカンドの人びとよ，次のことを自覚せよ。すなわち，そなたたちに先ずシナ皇帝の勅令，**【p. 168 / fol. 84b】**二番目にアムルサナーの勅令〔がある〕。この地域（bu diyārlar）はどれほどの時からか，カルマクの王たち（töräläär）に服属（qalam-ravī）してきているようだ。そなたたちもこの地域の租税（bāj ḫarāj）を毎年，毎月納め続けるという約束により貴人（čoŋ）にされ〔この地域に〕送り〔帰された〕のであれば，この者たちに顔をそむけ，不誠実なことをして剣をふるうのは何故なのか。このように無駄で結末が破滅的な〔事に〕[47]足を踏み入れるのは，先見の明のないことである。そなたたちを騙した[48]〔ダバチが王位を廃され，イラが散

43) D126 は Fulat を QVLAT と綴るが，Or. 9660, fol. 95a の FLAT，Or. 9662, fol. 110a の FVLAT による。Keräk-yaraġ（Keräkyarāq）には「宮廷必需品（Hofbedarf）を調達する人」（Gerhard Doerfer, *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, Band 3, Wiesbaden: Franz Steiner, 1967, p. 593）の意味がある。アキムシュキン氏は「軍隊に必要な装備，糧食，馬糧，武器の諸地区，諸地方からの納入を司る国家組織の役人。その職務は時により同一ではなく，変化した」（O. F. Akimushukin, *Shakh Makhmud ibn Mirza Fazil Churas*, *Khronika*, Kriticheskii tekst, perevod, kommentarii, issledovanie i ukazateli, Moscow: Nauka, 1976, p. 293, note 184）と解説している。清朝治下では「克勒克雅喇克伯克」と表記され，「商賈貿易，徴収其税入者」などの説明がある（佐口透『18-19 世紀 東トルキスタン社会史研究』東京：吉川弘文館，1963 年，114-115 頁）。

44) Or. 9662, fol. 110a による補遺。ただし，Or. 9662 は Fulat Qozï Keräk-yaraġ を Fulat Qozï Keräk-raġ と誤記しているので，同様の誤りとみなし，ya を補いサーリフ・ケレクヤラグとする。

45) D126 は JVJŠ，Or. 9660, fol. 95a は ḪVAJŠ，Or. 9662, fol. 110a は ḪVJAŠ と綴る。

46) トゥーカール・ミールザーはクルグズであり，アルース・ミールザーも同様であろう（本書【p. 160 / fol. 80b】「日本語訳注（6）」77 頁参照）。

47) išqa。Or. 9660, fol. 95a の AŠQH，Or. 9662, fol. 110b の AŠ QH による補遺。

48) fann urġan。D126 は urġan を AVZĠAY と綴るが，Or. 9660, fol. 95a; Or. 9662, fol. 110b の AVRĠAN による。

乱状態になったのを，今〕[49]，シナ皇帝の勅令によりアムルサナーが王座に坐った。その全ての辺境, カルマクの事は決着がついた。この者たち〔カルマク〕に服属したらしいどの地域も，皇帝[50]に従属することになった。〔皇帝は〕我々を数人の者とともに遣わした。すなわち,『ヤルカンド地域[51]をそなたたちの支配下におさめよ。皇帝[52]の勅令をもたらせ。どの者も〔その勅令を〕受け入れるならばよい。さもなければ，戦え。もし，そなたたちに対し〔敵が〕優勢になるならば，我々はここから一隊一隊と派兵しよう。我々は戦って城市の民を捕虜にし，城市を荒廃させ，全ての四足にいたるまで殺害せねばならない』と言って，自らの信仰により誓いを立てた。今，そなたたちへの有益な言葉は次のとおりである。すなわち，そなたたちは敵対の剣を投げ捨て，そして国の人びとを率いて我々の前に出てくるように。我々は皇帝[53]，王（törä）からそなたたちの罪〔の赦し〕を求めよう。**【p. 169 / fol. 85a】**おそらく，〔皇帝，王は〕罪を見逃し，さらに，一つの城市の帝王権（pādišāhlïġ）を与えるだろう。我々からの姻戚関係の義務（ḥaqq-i qarābat）はまさにそれである。もし，そなたたちがこの言葉を受け入れないならば，そなたたちの責任は自ら負うことになろう。書状を終える。平安あれかし」。

この堕落した〔内容の〕書状[54]が〔読み〕終えられたのち, ホージャ・ジャハーン・ホージャムは激怒して,「書状を引き裂いて火に投げ入れるように」と命令した。即座に書状を引き裂き，細かく切り刻んで[55]火に投げ入れた。その後，ホージャム猊下は祝福された額にいくらか皺を寄せ, この使者たちに次のように話しかけた。すなわち,「悪しき逃亡者たち（bad najātlar）よ，そなたたちの皇帝[56]，王は無駄で馬鹿げた言葉を語っているようだ。そなた自身を益荒男（er）と思うならば, さらに, ある者を吼えるライオン[57]と思え, というよく知られた〔諺が〕[58]ある。賢明なのは，事の結末を見るということである。今にいたるまで，我々は方策なくカーフィル

---

49) Dabāčī törälikdin ma‘zūl bolup Īlānïŋ mutafarriqa bolġanï ḥālā。 D126 は「ダバチが王となった」と記すが，Or. 9660, fol. 95a-b; Cf. Or. 9662, fol. 110b による。

50) Ḫāqān。D126 は ḪAN と綴るが，Or. 9660, fol. 95b の ḪAQAN による。

51) Yārkand diyārï。Or. 9662, fol. 110b は「モグーリスターン地域（Mōġūlistān diyārï）」，Or. 9660, fol. 95b はその誤記であろうが，Mūlistān diyārlarï と記す。

52) Or. 9660, fol. 95b は「シナ皇帝（Ḫāqān-i Čīn）」と明記する。

53) Ḫāqān。D126 は ḪAN と綴るが，Or. 9662, fol. 111a の ḪAQAN による。

54) nāma-i fasād- āmīz。D126 は FSAD NAMH AMYZ と語順を間違えており，Or. 9660, fol. 95b; Or. 9662, fol. 111a の NAMH FSAD AMYZ による。

55) rīza rīza qïlïp。D126 は rīza rīza を ZYRH ZYRH と誤記しており，Or. 9660, fol. 96a の RYZH RYZH による。

56) Ḫāqān。D126 は ḪAN と綴るが，Or. 9662, fol. 111b の ḪAQAN による。

57) šīr-i ġurrān。D126; Or. 9662, fol. 111b は ġurrān を ĠVRAN と綴るが，A グループの写本（Turk d. 20, fol. 129b; D191, fol. 143b; ms. 3358, fol. 199a）の ĠRAN による。

58) maṯal。Or. 9660, fol. 96a; Or. 9662, fol. 111b の MṮL による補遺。

に服従していた。今や，はかなく過ぎゆく生涯の準備と償いのためにこの仕事をしている。我々には，この世においていかなる希望も残っていない。今や，我々の目的は聖戦の決意（nīyat-i ġazāt）である。益荒男たち（eränlär）を聖戦のために創造している。全ての信仰（‘ibādat）のなかで最も優れているは聖戦である。もし死ねば，殉教の位（šahīdlik）は我々の遺産である。再びカーフィルへの服従に戻るということを誰も我々に疑わないだろう。<神が望むならば>。生命の最後の一息まで，**【p. 170 / fol. 85b】**我々は短刀で切りあい，そなたたちに服属しない」と言って，使者たちに退去の許可を与えて帰らせた。この使者たちは百千の不安，悲しみをもって城市の外に出た。行って，ホージャ・ブルハーン・アッディーンに起きた事を説明した。ホージャ・ブルハーン・アッディーンをはじめ全ての者に落胆の念が生じ，絶望の傾向がまさり，考え込んだ。

物語の章。

ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は使者が帰ったのちに，考えて王子たちと相談し，ウラマーたちとアミールたち[59]を，さらに国[60]の全ての首領（sardār），千人長[61]，百人長（yüz bašï）を集めた。〔上官の？〕無い者たち（yoqlar）を探し出し[62]，同様にサーンジュー（Sānjū）[63]からサイイド・バシャル・ホージャ（Sayyid Bašar[64] Ḫōja），カルガリク（Qārġālīq）[65]からイブラーヒーム・ホージャ（Ibrāhīm Ḫōja），ミール・アーザム・ホージャ（Mīr A‘ẓam Ḫōja），「二つの川のあいだ」[66]からターリブ・ホージャ（Ṭālib Ḫōja），城市（šahr）からアブドゥ・ラヒーム・

59) umarālar。D126 は umarā を ‘MRA と綴るが，Or. 9660, fol. 96b; Or. 9662, fol. 112a の AMRA による。

60) yurt。D126 は YVRVT と綴るが，Or. 9660, fol. 96b; Or. 9662, fol. 112a の YVRT による。

61) miŋ begi。D126 は単に MNKY と記す。Or. 9660, fol. 96b の MYNK BYKY による。なお，Or. 9662, fol. 112a は「全ての首領たちのうち千人長（tamām sardārlardïn miŋ bašï）」と記す。

62) istäp tafïp。istäp は，D126; Or. 9660, fol. 96b; Or. 9662, fol. 112a ともに ASTAB と綴られている。

63) ヤルカンド城市から東南およそ 150km のグマ（Guma Bazar）からさらに南南東およそ 50km に位置する Sanju Bazar，もしくはその傍らを流れる河川（Sanju Darya）に当たろう。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NJ44 の地図参照。

64) D126 では ŠYR を線で抹消し，BŠR を加筆している。Or. 9660, fol. 96b は BŠR，Or. 9662, fol. 112a は ŠYR と綴る。

65) ヤルカンド城市の南南東およそ 60km に位置する。現在の葉城（Qaghiliq）。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NJ43 の地図参照。

66) Iki sunïŋ arasï。Or. 9662, fol. 112a は「二つの川の島（iki sunïŋ aralï）」と記す。ヤルカンド本城の西 100 里に「伊奇蘇寧阿喇斯（Iki suniŋ arasi）」という行政単位（村庄）がある（堀直「清代「葉爾羌」の境域」『甲南大学紀要』文学編 134，歴史文化特集，2004 年，99-100 頁の表参照）。

ホージャ（‘Abdū Raḥīm [67] Ḫōja），ヤークーブ・ホージャ（Ya‘qūb Ḫōja），オフル [68] から〔ホージャム・ヤール・ホージャ（Ḫvājam Yār Ḫvāja）〕[69]，ホージャム・ニヤーズ・ホージャ（Ḫōjam Niyāz Ḫōja），カマール・ホージャ（Kamāl Ḫōja），ムッラー・ユーヌス（Mullā Yūnus），ムッラー・クトゥルク（Mullā Qutluq），タガルチ [70] からクルバーン・ホージャ（Qurbān [71] Ḫōja），ミーシャール（Mīšār）[72] からナビーラ・ホージャ（Nabīra Ḫōja），カームラー [73] からアブドゥ・ラヒーム・ホージャ（‘Abdū Raḥīm [74] Ḫōja），ラバートチ [75] からアルマース・ホージャ（Almās Ḫōja），フスカム（Fūskām）[76] からユースフ・ホージャ（Yūsuf Ḫōja），さらにまた，国の長（ra’īs-i mamlakat）を全て集め，口を開いて次のように発言した。すなわち，「おお，ヤルカンドの人びとよ，**【p. 171 / fol. 86a】**次のことを知り，賢明になれ。すなわち，我々はムハンマド・ムスタファー猊下＜神が彼に祝福と平安を与えますように＞の光り輝く聖法（シャリーア）の普及のために，カーフィル（不信仰者）から顔をそむけ，イスラームの旗を我々の頭上に掲げた。よく考えて見れば，我々の仕事は活気づいていない。先ず我々はウシュに軍を送ることになった。我が同胞（兄弟）ユースフ・ホージャが世から去った。このような事を解決する人は，彼であった。我々は彼から離れた。ウシュに行った軍は，ろくでなしのクルグズに騙され，敗北を喫して来た。我々自身の軍の武器装備〔の獲得〕により，敵は最良に装備して優勢になった。さらに，数人のペテン師たちが策略の助言をして，ホージャ・アブド・アッラーとともにホージャ・ムーミンがみずから恐れて城市を捨て，カシュガルからこちら側に来た。カシュガルを手中から失った。敵はさらに優勢になった。我々はクルグズたちに全て馬や名誉の服装（sar u

---

67) Or. 9662, fol. 112a では ‘Abd al-Raḥīm。

68) Ofur ? < AVFR。Or. 9662, fol. 112a は AVFRY，Or. 9660, fol. 96b は AVRFY と綴る。ヤルカンド本城の東北 30 里に「阿布普爾（Af fur / 窩坡爾」という行政単位（村庄）がある（堀直「清代「葉爾羌」の境域」99-100 頁の表参照）。

69) Or. 9660, fol. 96b による補遺。

70) Taġarčï < TĠARJY。ヤルカンド本城の北 20 里に「塔噶爾齊（Takharji）」という行政単位（村庄）がある（堀直「清代「葉爾羌」の境域」99-100 頁の表参照）。

71) D126 は QVRBAN と綴るが，Or. 9660, fol. 96b; Or. 9662, fol. 112a の QRBAN による。

72) ヤルカンド本城の北 15 里に「密什雅爾（Mish Yar）/ 密沙爾」という行政単位（村庄）がある（堀直「清代「葉爾羌」の境域」99-100 頁の表参照）。

73) Kāmrā < KAMRA。ヤルカンド本城の西 20 里に「喀瑪喇克（Qamraq）/ 克瑪拉 / 喀瑪拉」という行政単位（村庄）がある（堀直「清代「葉爾羌」の境域」99-100 頁の表参照）。

74) Or. 9662, fol. 112a では ‘Abd al-Raḥīm。

75) Rabātčï。Or. 9660, fol. 96b の RBATJYによる。D126 は RBAJJY，Or. 9662, fol. 112a は RBADJY と綴る。ヤルカンド本城の西 70 里に「喇巴特齊（Rabatji）」という行政単位（村庄）がある（堀直「清代「葉爾羌」の境域」99-100 頁の表参照）。

76) ヤルカンドの南方 25km に位置するポスガム（Posgam）に当たろう。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NJ43 の地図参照。

pāy [77])を与え，そのように訓練した。そのろくでなしたちは恩知らずな事をした。敵の軍となった。今，中国人，カルマク，幾らかの城市の軍，そして幾らかのクルグズたちがヤルカンドを包囲した。そなたたちは使者の書状〔の内容を〕聞け。今や，我々は子孫とともに巡礼（ḥajj）を**【p. 172 / fol. 86b】**決意した。この者たちもその望みを達成すれば，そなたたちに苦難とならないならば〔よかろう〕。次のことが知られている。すなわち，この運命の不吉は我々のほうへ向いており，最も幸運な星は彼らの側に向いている。ダスターンの〔子〕ルスタム [78] が戦場に入ったとしても，勝利の可能性はない。

詩

そなたは誠実でない。おお，運命の天空よ，そなたは曲がって動いている

私はそなたに [79] 不平を言わねばならない。そなたはこれほどにも裏切り者である

どこでそなたは愚かで性悪な希望を与えるのか

高潔で賢い人に対しそなたはペテン師 [80] である

暴虐で復讐心の強い人たちのほうへ，そなたの最も幸運な星は

勝利を割り当て，そなたはそれを悲しんでいる

どこで寛大な人が死ねば，そなたは危険なことをするのか

そなたは最も大きな不吉な星 [81] を割り当てる。そして，そなたは詐欺師

そなたは王や王子たちの血を惜しみなく流す

なんたる驚き。そなたは流血を好み，そなたは無慈悲で [82]，そなたは血に飢えている

誠実な者（サーディク）よ，もしまさにそうであるならば，その仕事は天において卓越している

そなたは何を期待 [83] するのか。そしてもちろん，そなたは悲惨である」

と言って涙を流し，この人びとのために祈願（duʻā）をおこなった。この祈願の矢は応諾の

---

77) D126 は NAY と誤記するが，Or. 9660, fol. 97a; Or. 9662, fol. 112b の PAY による。

78) Rustam-i Dastān。ルスタムは『シャー・ナーマ』に登場するイランの伝説的英雄で，ダスターンはその父の名。なお，D126; Or. 9660, fol. 97b; Or. 9662, fol. 113a は後者を DASTAN と綴る。

79) seniŋdin。D126 は SNVNKDYN と綴るが，Or. 9660, fol. 97b の SNYNKDYN，Or. 9662, fol. 113a の SNNKDYN による。

80) makkār。D126 は M KAR と綴るが，Or. 9660, fol. 97b; Or. 9662, fol. 113a の MKAR による。

81) naḥs-i akbar。D126 は naḥs を NḪS と綴るが, Or. 9660, fol. 97b; Or. 9662, fol. 113a の NḪS による。

82) bī-raḥm。D126 は raḥm を RḪM と綴るが，Or. 9660, fol. 97b の RḪM による。

83) umīd。D126 は AVMYD と綴るが，Or. 9660, fol. 97b; Or. 9662, fol. 113a の AMYD による。

標的に当たり，この祈願〔の対象〕に入っていた千人長[84]たちは，のちに全て〔ヤルカンドの〕[85]ベグ（beg）となった。

さて，祈願を**【p. 173 / fol. 87a】**終えたのち，この一団から嘆き叫ぶ声が沸きあがり，天空のドームを満たした[86]。皆は次のように申し上げた。「おお，世界の帝王陛下よ。陛下からこのような落胆，失望〔が出てくるのは〕何故なのか。この荒れ狂う災難から避難なさり，我々を火のなかに投げ入れる。この火はそなた様をどのように焼くのか。我々をどのように焼くのか。我々全ての者がひとつの身体，ひとつの生命となり，他の者に道を与えない。我々の側からも使者が出て，その内容の書状が出されるならば，最も良いであろう」と提議すると，〔ホージャ・ジャハーン・〕ホージャムにとって，この得策は理に適っていると思われた。そして，〔ホージャムは〕ある者に書状を書くよう命じた。使者の役にサーリフ・ハリーファ（Ṣāliḥ Ḫalīfa）を任じた。サーリフ・ハリーファは壮麗さの・・・[87]を整え，書状を頭にはさみ，城市の外に出て，山がちの・・・[88]に近づいた。この知らせをホージャ・ブルハーン・アッディーンは聞き，その者たちは中国人，カルマク，クルグズ，そして不正な知識人たち，抑圧者のアミールたち，スーフィーのようなディーヴァーナたち（ṣūfīvaš dīvānalar）を集め，壮麗さの・・・[89]を整え，使者に通行を許した。サーリフ・ハリーファは使者の仕事をおこない，丁重に頭から書状を取り出した。ホージャ・ブルハーン・アッディーンの合図により書状読み[90]が〔書状を〕取って読んだ。次のように書いてある。**【p. 174 / fol. 87b】**すなわち，

「先ず，この書状は神の名で〔書かれている〕
二つそれぞれの世〔現世と来世〕の画家の図
炬火を燃やす天空の玄関
王の蟻たる配達人の〔日々の糧〕[91]

それから，我々は讃えられるべき至高の神様の心厚き恩寵を得て，カーフィルたちへの服従から顔をそむけ，聖戦（jihād ġazāt）をすることによりイスラームの旗を我々の頭上に掲げた。

---

84) miŋ begi。Or. 9662, fol. 113b は miŋ bašï と記す。
85) Yārkandgä。Or. 9660, fol. 97b; Or. 9662, fol. 113b による補遺。
86) kök gunbaẕnï fur čïrmadï。「満たした」の訳語は確実ではない。
87) ‘Ṣ‘ṢH。この語の読みと意味を解し得ない。
88) D126 は KR‘，Or. 9660, fol. 98a は KRV，Or. 9662, fol. 113b は KR‘H と綴るが，読みと意味を解し得ない。
89) ‘Ṣ‘ṢH。この語の読みと意味を解し得ない。
90) nāma ḫān。Or. 9662, fol. 114a は munšī（書記）と記す。
91) rizq。Or. 9660, fol. 98a による補遺。

おお，ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャよ，何故そなたたちはこのカーフィルの親密な友となり，我々ムスリムたちにこの様な圧制をこうむらせるのか。気高い神の言葉はまさに＜信者たちは兄弟である＞〔『クルアーン』49-10〕ということだ。すなわち，信者の一人ひとりに対する裏切りは決して許されない。もし，そなたたちの希望が国の占有（milk-i mamlakat）にあるならば，カーフィルたちとの協力[92]は必要ではない。そなたたちがそちら側から攻撃するならば，我々はこちら側から攻撃する。両者がひとつになり，カーフィルをあいだから取り除こう。その後，どの城市を選ぼうとも，そなたたちはその城市の統治の王座において確乎となるであろう。そうでなく，そなたたちがすべての地域（hama diyār）を必要とするならば，我々はそれを道理にかなっているみなし，国（mamlakat）をそなたたちに与えよう。我々は属人（tābi‘）たちとともに巡礼に出よう。我々には今，なんの願望も残っていない。そなたたちの順番の始まりである。いかようであれ，我々の目的は**【p. 175 / fol. 88a】**このカーフィルたちの足跡からこの国（bu yurtlar[93]）を清めることである。聖戦（ġazāt）は，他の者たちにとって連帯義務（farḍ-i kifāya[94]）であっても，我々には個人義務（farḍ-i ‘ayn）である[95]。おお，ホージャ・ブルハーン・アッディーンよ，そなたも使徒猊下＜神がかれに祝福と平安をあたえますように＞の聖法を明瞭[96]にして，そのスンナを遂行することが必要，必然である。

共同体の集合（ijmā‘-i ummat）〔の一員〕である全ての人への言葉は次のとおりである。イスラームから分け前のない者全ての血〔の犠牲〕は，我々にとって合法である。我々は〔彼らを〕殺せば，聖戦士〔になり〕，我々が死ねば，殉教者となるのである。そなたたちはカーフィルの勅令によりカーフィルたちの軍を率いて来ている。そなたたちにはカーフィルに対抗する能力がある。問題は次のとおりである。カーフィルたちが非常に優勢であるならば，ムスリムたちが弱体であるならば，その状態において仕方なく服従することは必要である。〔しかし〕このそなたたちが行なった事を，最初にも最後にも，どんなムスリムも行わなかったのである。我々は生きている限り，カーフィルに決して屈服しない。我々は短刀で斬り合い，もみ合って死ぬ。ヤルカンド城市のなかには，そなたたちに裁定が下されるまで（fayṣal bergüncä），人がいる。一人のムスリムは二人の代わりになる。彼自身が一人であり，その信仰が一人[97]。次の

92) yāvarlik。D126 は YARVRLYK と綴るが，Or. 9660, fol. 98b; Or. 9662, fol. 114a の YAVRLYK による。

93) D126 は YVRVTLAR と綴るが，Or. 9660, fol. 98b; Or. 9662, fol. 114b の YVRTLAR による。

94) D126 は KPAYH と綴るが，Or. 9660, fol. 98b; Or. 9662, fol. 114b の KFAYH による。

95)「連帯義務」「個人義務」という訳語は，両角吉晃「ファルド」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店，2002 年，833 頁によった。なお，この二つの義務の違いとジハード，ガザートとの関連については，濱田正美「『塩の義務』と『聖戦』との間で」『東洋史研究』52-2，1993 年，139-142 頁参照。

96) fāš。D126 は FARS と綴るが，Or. 9662, fol. 114b の FAŠ による。

97) bir kiši。D126 は「二人（iki kiši）」と記すが，Or. 9662, fol. 115a による。

ようなよく知られた諺がある。城市の城壁[98]が紙で出来ていても，武器[99]が針[100]で出来ていても，人々が弱い者であっても，城市のなかから崩れない限り，外から取ることはできない。我々は幾ばくかの【**p. 176 / fol. 88b**】時まで城市を保持するであろう。貯蔵した数年分の食糧，燃料，水が用意されている。我々の選択〔の時〕が来れば，出て戦う。さもなければ，平穏に休養するであろう。今，戦いに出ても，百から一に順番は来ないのである[101]。そなたたちが攻撃するならば，我々も攻撃せねばならない，と言葉を尽くした。書状を終える。平安あれかし」。

要するに，ホージャ・ブルハーン・アッディーンは気力が失せた。使者に次のように語りかけた。すなわち，「そなたたちのホージャは限度を超えて知識を学んでいる（ma‘rifat oqup durlar）。このような懲罰的な正当な言葉で戦役（sipāhgarčilik）は終わらない[102]。我々はこの地に自らの選択で来たのではない。我々はシナ皇帝，アムルサナーの勅令により来ている。そなたたちのこの知識は彼らには信じられない。我々にも理にかなっているとは思われない。我々の背後は遊牧集落，我々は二つの遊牧集落の山に寄りかかっている[103]。今や，〔そなたたちに残されているのは〕このヤルカンド城市である[104]。たとえ百，このような城市があっても，我々は彼らの勢力と助力により取ろう。我々は長く待つことに飽き飽きしない。我々は今日取らなければ，明日取る。最終的に手に入らないでどうなろう」と言って，使者を戻らせた。しかし，その日は遅くなっていた。宿泊させて，翌朝退去の許可を与えた。

さて，ガーズィー・ベグには，クズグン（Quzġun）という名のタグリクで，勇敢な商人の出で舅（pidar-i ‘arūs）である人物がいた。〔この〕とても悪賢く狡猾な無頼で邪悪な者が【**p. 177 / fol. 89a**】次のように助言した。すなわち，「我が娘婿，ガーズィー・ベグには，一人の・・・[105]の者がいた。ダヴァン・ホージャ（Davān Ḫōja）という名。彼には，一人のワズィー

98) safīl。D126 は ṢFL と綴るが，Or. 9660, fol. 99a; Or. 9662, fol. 115a の SFYL による。
99) ḥarba。D126; Or. 9660, fol. 99a; Or. 9662, fol. 115a は HRBH と綴るが，ḤRBH の誤記とみなす。
100) ignä。D126 は NYKH と綴るが，Or. 9660, fol. 99a の AYKNH による。
101) yüzdin birgä nawbat yetmäy dur。今はその時ではない，という意味であろうか。
102) sipāhgarčilik pütmäs。D126 は pütmäs を TVTMAS と綴るが，Or. 9662, fol. 115b の PVTMAS による。
103) Arqamīz avulluq iki avulluq taġqa yölänip durmīz。「二つの遊牧集落」とは，シナ皇帝とアムルサナーそれぞれの勢力圏の暗喩であろう。なお，avulluq は D126; Or. 9660, fol. 99b の AVLLVQ による。Or. 9662, fol. 115b は AVLKVK と綴る。
104) A グループの写本の Turk d. 20, fol. 143b では「今や，このヤルカンド城市，むしろ城壁のなかのみが残っている」，D191, fol. 148a では「今や，そなたたちのこの城市のみが残っている」，ms. 3358, fol. 204a では「今や，このヤルカンド城市，城壁のなかのみが残っている」と記されている。
105) MVYVM SAZ。読みと意味を解し得ない。

ル（wazīr）[106]がいた。ギヤース（Ġiyāṯ）という。〔ギヤースは〕この使者たちとともに来ている。今夜，私が彼を我が大天幕に連れて行き，そそのかし，道を踏みはずさせば，彼がガーズィー・ベグに語り，ガーズィーが変心すれば（bozulsa），〔ヤルカンド〕城市は容易に手に入る」と言った。ホージャ・ブルハーン・アッディーンはこの策略が気に入った。即座にギヤースを大天幕に導いた。その夜，あつく客もてなしをして，ホージャ自身から次のように約束した。すなわち，「もしガーズィーが『我々を』と言って，城市をこわして渡すならば，我々は彼にヤルカンドのハーキム位を与え，その息子も別の城市のハーキムしよう。カルマクが我々の時代のようになれば，七十世代までハーキム位は遺産となるであろう。もし，そなたたちがこの言葉をガーズィー・ベグに納得させるならば，我々はそなたたちにも高い職位（uluġ manṣab）を与え，ダルハン位の証書（darḫanlïq nišān）を与えよう」と言って，その内容で書面を書いてギヤースに与えた。この出来事を〔使者の〕サーリフ・ハリーファに知らせないで，翌朝，使者を出発させた。この使者たちは無事安全に〔ヤルカンド〕城市に入り，ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下に起きた出来事を説明した。ホージャムは，「我々はこのような懲らしめを決して恐れない」と言って，顧慮しないで，満足の境地にあった。

物語の章。ニヤーズ・ベグ・イシク・**【p. 178 / fol. 89b】**アガについて聞かなければならない。

この者の父方のおばの子たち[107]，すなわち，バハードゥル・ベグ，その息子たち〔すなわち〕クチャーのハーキム，アッラー・クリ・ベグ，フダー・ヤール・ベグ，ムハンマド・ヤール・ベグ[108]，義父のシール[109]・ムハンマド・エミーン・ベグ，そしてまた，それとは別にいくらかの集団（jamāʻa）が外の〔ホージャ・ブルハーン・アッディーンの〕軍とともに来ていた。〔毎回この者たちはこの尊師たち[110]に対して馬鹿げた言葉を言っていた〕[111]。〔彼らは〕ニヤーズ・ベグに書状を矢じりに結びつけて送った。あるいは，使いが仲介になった。その内容は次のとおり。すなわち，「おおニヤーズ・ベグよ，そなたは家族とともに以前から我々に好まれてい

106) ワズィールは一般に「大臣」の謂いであるが，ここではそのような政府高官を指しているとは思われない。

107) munïŋ ʻamma-zādalarï。「子たち」と複数形になっているのは，おばの孫も含んでいるからであろう。

108) A グループの写本（Turk d. 20, fol. 136a; cf. D191, fol. 149b; ms. 3358, fol. 205b）は「バハードゥル・ベグの息子たち，クチャのハーキム，アッラー・クリ・ベグ，その弟ムハンマド・ヤール・ベグ」（Bahādur Begniŋ oġlanlarï Kūčā ḥākimi Allāh Qulï Beg inisi Muḥammad Yār Beg）と血縁関係を明白に記すが，フダー・ヤール・ベグの名を挙げていない。

109) Šïr。D126 は ŠRH と綴るが，Or. 9660, fol. 100b の ŠYR による。

110)「この尊師たち」とは，ヤルカンドのホージャ・ジャハーン・ホージャムたちのことであろう。

111) Har bāra bular bu ʻazīzlarnïŋ ḥaqqïda nā-maʻqūl sözlär bašlar erdi。Or. 9660, fol. 100b; cf. Or. 9662, fol. 116b による補遺。

た（marġūb ediŋiz）。今も，そなたが何かして，城市をこわして渡すように。我々はそなたをヤルカンドのハーキムにしよう。ハーキム位はそなたの遺産である」。この言葉が真実であることに対して，アッラー・クリ・ベグ，フダー・ヤール・ベグが数箇所において『クルアーン』で誓い[112]をしている。

ニヤーズ・ベグはこの書状の内容を知り，城市をこわす考えになった。幾人かの近親の人たちと相談して，次のように得策が定まった。すなわち，彼の庭園の一端が城市の城壁に隣接していたが，城市にめぐらされた通りが城壁〔と〕庭園の塀とのあいだにあった。まさにこの庭園のひっそりとした隅（ḫalwat gūšasï）から坑道[113]を掘って三十グラチュ[114]地面を正確にうがち，城壁の外側は崖であったが，その崖から穴をあけて出るのを目指して，騎馬の者が二人並んで進めるほどの坑道を〔掘り〕始めた。坑道の入口に門を取り付けた。「その目的は，坑道が用意できたときに我々が**【p. 179 / fol. 90a】**ホージャ･ブルハーン･アッディーン･ホージャムに知らせるならば，千に近い人が城市に入れば，我々の属人たちとともに我々が加わるならば，〔城市内の人たちは〕命を救えないで，一夜で滅びるということである」と言って，尽力して坑道に踏み入った。夜になると，その上部〔の土砂〕を落として氷室に詰め込み，夜になると，坑道では目が見えなくなる。その庭園もひっそりとしていた。なぜならば，季節は冬であり，庭園を散策する時節ではなかったからである。

このように坑道を城壁の向かい側から七, 八グラチュ通した。彼自身〔ニヤーズ・ベグ〕の属人のなかに敬虔な人がいたが，その人が突然この秘密を知り，即座にオルダ（宮廷）に行って密かに上申した。ホージャム〔ホージャ・ジャハーン・ホージャム〕はニヤーズ・ベグをオルダに呼び出し，密かに人をつかわした。〔その人は〕行って坑道を見て，〔上申が〕正しいことを明らかにした。ホージャムは命令して，ニヤーズ・ベグを捕えて拘束した。しかし，妻子の家を略奪しなかった。重い処罰もしなかった。なぜならば，ニヤーズ･ベグの娘アーイシャ･ベギム（‘Āyiša Begim）を, ホージャムは娶っており, 義父たることを尊重したのである。〔ホージャムは〕「この恩知らずは近親関係の義務を守らない〔が〕，私は守ろう」と言って過度に罪を問わないで，監視下に置いた。しかし，アーイシャ・ベグ〔ベギム〕のオルダには決して行かなかった。

---

112) qasam。Or. 9662, fol. 116b による補遺。

113) naqb。D126; Or. 9660, fol. 100b; Or. 9662, fol. 117a は LQB と綴るが，A グループの写本の Turk d. 20, fol. 136b; D191, fol. 149b; ms. 3358, fol. 206a の NQB による。

114) ġulač。D126 は ‘LAJ と綴るが，Or. 9660, fol. 100b; Or. 9662, fol. 117a の ĠVLAJ による。グラチュは 1 尋（ひろ）の長さ（Gunnar Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, Lund, 1964, p. 112; 堀直「18 ～ 20 世紀・ウイグルの度量衡について」『大手前女子大学論集』第 12 号，1978 年，59 頁の qūlāch）。

詩

おお，そなたは行け。決して誰をも苦しめるな

【p. 180 / fol. 90b】利益を求めて，或る者にひどく圧制をおこなうな

不当に足を踏み入れるな。誰をも裏切るな

両世界のなかで，そなたの生命に厳しいことをするな

どんなこともせよ。一人の孤児の心を傷つけるな

確かに彼は王（シャー）である。そなたは彼をいじめるな

いくらかの敵を，そなた自身にとって親友とした

そなたの秘密を明かす他人を友とするな

もしそなたに，真実の人，事柄自体が分からないならば

心底から信じる者たちは悲しむな

天がどれほどの圧制無情を他人によりなしても

そなた自身を知れ。そなたの苦しみを飲み込んで[115]，敵に表明するな

誠実な者（サーディク）よ，過ぎ去った尊師たちの魂を知れ

それらの徴（āyat）の列に入るならば，その栄誉を知れ，恥じるな

物語の章。

アシュール・コズ・ベグ（‘Ašūr Qozï Beg）という野卑な人がいた。出自はカルマクの貸し馬業の商人の出であった[116]。彼をホージャム〔ホージャ・ジャハーン・ホージャム〕が教導して（tarbiyatlar qïlïp），タグ・ボイ[117]のハーキムにしていた。イスラーム〔信仰が〕明白になったとき，ハーンのケレクヤラグ[118]にしていた。全ヤルカンドの仕事とオルダの用具を彼にまかせていた。まるで王国全体の宰相（wazīr jumlat al-mulk）であった。彼からの許可なしでは何事も完了しなかった。

さて，この頃**【p. 181 / fol. 91a】**ホージャ・マースーム（Ḫōja Ma‘ṣūm），バイ・フラト（Bay Fulat）[119]をはじめ幾らかの者たちを，カルマクに心寄せる言葉を発したであろうと言って，捕

115) yutup。D126 は BVTVB と綴るが，Or. 9660, fol. 101b; Or. 9662, fol. 117b の YVTVB による。

116) Aṣlï Qālmāq kerākeš saudāgarlarïdïn erdi (Or. 9662, fol. 118a)。D126 は「勇敢な商人」（Aṣlï Qālmāq karrār saudāgarlarïdïn erdi），Or. 9660, fol. 101b は単に「商人」（Qālmāqnïŋ saudāgarlarïdïn erdi）と記す。

117) Taġ-boyï (<TAĠ BVYY)。地図上に比定できていない。原義は「山のふち，山麓」。

118) ḫān kerek-yaraġï。D126 は ḪAN KRAK YRAĠ と綴るが，Or. 9662, fol. 118a の ḪAN KRK YRAĠY による。ケレクヤラグについては，前述の【p. 167 / fol. 84a】の訳注を参照されたい。

119) Or. 9662, fol. 118a は「ホージャ・マースーム・バイ，ムッラー・スィッディーク，バイ・フラト」（Ḫvāja Ma‘ṣūm Bay Mullā Ṣiddīq Bay Fulat）と記す。

らえ牢獄に投じていた。この者たちは数日，牢獄で横になり，〔牢獄の湿気が増し，この者たちがとても衰弱し〕[120] 元気がなくなったとき，牢獄番（zindān band）がホージャムに上申していた。ホージャムは，「そのようであるならば，牢獄から出して，各人に委ねよ。家のなかで拘束して守らせよ」と命令していた。このアシュール・コズ・ベグは，「ムッラー・スィッディーク（Mullā Ṣiddīq）を，ホージャ・マースームを，私は家で守ろう」と言って，家に連れて行っていた。

ホージャ・マースーム〔と〕ムッラー・スィッディークはアシュール・コズ・ベグを誘惑して，自分のホージャに心を寄せさせた。アシュール・コズ・ベグは変心して，バイ・フラトによりホージャ・ブルハーン・アッディーンに書状を出した。その内容は以下のとおりである。「私は自分のホージャたちに逆らい，『ホージャ・ブルハーン・アッディーンを』と言った[121]。某日[122]，二，三千の者を内城（ark）のほうへ馬駆けさせよ。我々の側から五十，六十の者が鍬（ketmän）鋤（bel）で城壁を崩してやる。その裂け目から城市に入り，オルダへ突入させよ。我々はそれまでに太鼓のために人を置こう。シャーディヤーナ（šādiyāna）[123] を演奏して，『時代はめぐる[124]。シナ皇帝[125]，アムルサナー〔の時代〕』と言う。このようにして城市を取ることができる」と書状に書かれている。ホージャ・ブルハーン・アッディーンをはじめ皆は，この良き知らせに喜び，アシュール・コズ・ベグに，ニヤーズ・ベグにヤルカンドのハーキム職，イシク・アガ職を約束した。バイ・フラトはもう一晩すごして城市に入り，この**【p. 182 / fol. 91b】**良き約束をもたらし，出来事を説明した。翌朝，ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム猊下に関係（nisbat）のある者たちを集め，城市をこわすことに努めた。

しかし，アシュール・コズ・ベグにスルターン・ホージャ（Sulṭān Ḫōja）という名の息子がいた。ホージャム猊下〔ホージャ・ジャハーン・ホージャム〕[126] の小姓（ušaq）であった。この者〔スルターン・ホージャ〕が聞き知り，父を非難して次のように言った。すなわち，「おお，父よ，そなたがしようとすることは，なんという悪しき背信なのか。我々はこの悪名を免れることが

---

120) zindān ruṭūbatlik namnāk kelip bular tola ḍa‘īf bolup。Or. 9660, fol. 102a; cf. Or. 9662, fol. 118a による補遺。

121) Or. 9660, fol. 102a は「私はホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムに従った」（Ḫvāja Burhān al-Dīn Ḫvājamġa tābi‘ boldum）と記す。

122) fulān küni。A グループの写本の Turk d. 20, fol. 138a は「水曜日の夜明けに」（čahār-šanbe küni saḥar waqtïda），D191, fol. 151a; ms. 3358, fol. 207b は「水曜日」（čahār-šanbe küni）と記す。

123) シャーディヤーナは「勝利，成功などを祝福するために演奏される祝賀の音楽，喜びのメロディー」のこと（本書【p. 142 / fol. 71b】「日本語訳注（6）」64 頁の注 78 参照）。

124) dawr ba-dawr。D126 は DVR V BDVR と綴るが，Or. 9662, fol. 118b の DVR BH DVR による。

125) Ḫāqān-i Čīn。D126 は Ḫāqān とのみ記すが，Or. 9660, fol. 102a に従う。

126) Or. 9660, fol. 102b は「ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下」（Ḥaḍrat-i Ḫvāja Jahān Ḫōjam），Or. 9662, fol. 118b は「ホージャ・ジャハーン・アズィーズ」（Ḫvāja Jahān ‘Azīz）と名を明記する。

できるのか。これはなんとも恥ずかしいことである。何年ものあいだ，我々は我々のホージャたちから恩恵を受けて，大きな富に，位階に達しているのに，この方たちに対してこのような悪しき背信をもくろむならば，神は〔それを〕正当とみなすだろうか。このようにして地上に対し帝王となるよりも正直に死ぬほうがましである」と言った。アシュール・コズ・ベグは言った。「おお，我が息子よ，この事は今や仕上がった。阻止する時は過ぎた。バイ・フラトが約定[127]の書付を持ってきた。明日，夜が明けると，我々は事を構える」と言った。その息子はまた妨げた。その父は同意せずに怒った。剣を持って突進した。その息子は逃げて難をのがれ，オルダに行って直ちにホージャムにこの秘密を話した。ホージャムは，「そなたは嘘を言っている。そなたの父が怒ったので，そなたは中傷している」**【p. 183 / fol. 92a】**と言った。スルターン・ホージャは，「おお，世界の帝王よ，この言葉に矛盾はありません。それを考えないで対策するならば，もし私のこの言葉に誤りがあるならば，私は死にふさわしい」と言った。さらに，「バイ・フラトを連れてくるならば，〔彼を〕懲らしめるならば，真実がわかる」と言った。

ホージャムは命じた。バイ・フラトを連れてきた。この犬[128]の手を縛り，剣を抜き身にして，「おお，本当のことを言え，〔さもなければ〕我々は〔そなたを〕殺す」と言って懲らしめていた。仕方なく自供した。全て正しく出来事を説明した。ホージャム猊下はアシュール・コズを連れてくるよう命令した。ホージャ・クトブ・アッディーン・ホージャム（Ḫōja Quṭb al-Dīn Ḫōjam）[129]とホージャ・アービド・ホージャム（Ḫōja ʻĀbid Ḫōjam）[130]の両人[131]が，反逆[132]を起こさずに連れてくるために出向いた。

さて，アシュール・コズ・ベグは息子が逃げ去ったので，家に留まっておれないで，「情報を得よう」と騎乗して来ていた。途上で，この王子たち（šahzādalar）〔ホージャ・クトブ・アッ

---

127) buljaq。D126 は BVLḤAQ と綴るが，Or. 9660, fol. 102b の BVLJAQ による。ショー氏は BVLJAQ を buljáq と転写し，‘a rendezvous, a station for troops’ と解釈している（Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kàshghar and Yarkand)*, Part II: Vocabulary, Turki-English, Culcutta, 1880, p. 52）が，『五体清文鑑』の綴り（BVLJAQ），転写（buljak），訳語（約束，予約，約定）に従う（『五体清文鑑』I，民族出版社，1957 年，484 頁，田村實造，今西春秋，佐藤長（編纂）『五體清文鑑譯解』上巻，京都大学文学部 内陸アジア研究所，1966 年，106 頁，No. 1836）。

128) sag。Or. 9660, fol. 103a は「不運なカーフィル」(kāfir-i bad-baḫt), Or. 9662, fol. 119b は「カーフィル」（kāfir）と記す。

129) ホージャ・ジャハーンの弟・ホージャ・ユースフの息子（本書【p. 69 / fol. 35a】「日本語訳注（3）」48 頁参照）。

130) ホージャ・ジャハーンの末弟ホージャ・アブド・アッラーの息子（本書【p. 65 / fol. 33a】「日本語訳注（3）」44 頁参照）。

131) ikövlän。D126 は AYKVN と綴るが，Or. 9662, fol. 119b の AYKVLAN による。

132) šūriš。D126; Or. 9660, fol. 103a; Or. 9662, fol. 119b は ŠVRYŠ と綴る。

ディーンとホージャ・アービド〕に出くわした。この王子たちは安心させるために「おお，アシュール・コズ・ベグよ，我々はそなたの所に行って客人になろう思って出てきた。そなたは逃げてきている」と言った。アシュール・コズ・ベグは，「ご主人さま，我が皇子さま（taqṣīr pādišāhzādalarïm），私は聞き及ばないで出てきている。今や，戻りましょう。家に行かせてください」と言った。王子たちは，「今，オルダに行こう」と言って，オルダに向かった。**【p. 184 / fol. 92b】**会議室（dīwān ḫāna）の前にいたった時，「ハーンの勅令」[133] と言って捕まえ，衣服を脱がせて手を縛り，ホージャムの御前に連れていった。ホージャムは立腹して，「おお，恩知らずよ，そなたのホージャ [134] から持ってきた，そなたの書付はどこに」と言った。この恩知らずは白状せずに否定した。その息子に会わせることにした。その息子は会うことを受け容れなかった。死に同意するが，その父と対面することは同意しない。結局，限度を超えて懲らしめたとき，〔アシュール・コズ・ベグは〕白状した。〔すなわち〕，「ある箱にしるしを付けた。書付はそこに」と。人が行って箱を持ってきた。見ると，包みのなかに封印した書付 [135] があり，取り出して読んだ。その内容については先に述べた。ホージャムは，「〔アシュール・コズ・ベグを〕連れていき，しっかり拘束せよ」と命じた。家僕たちは連れていき，拘束した。

翌朝，ヤルカンドの人びとを全て集め，アシュール・コズ・ベグに古い毛皮の外套（juba）を着せ，わら縄（kula）をその首につなぎ，会合室 [136] の中央におらせ，ホージャム猊下はアシュール・コズ・ベグの出来事を民（äl）に説明して，次のように言った。すなわち，「おお，邪悪で汚れた卑しい素性の者よ，私はそなたを，しかじかの時にカルマクから別れさせ，救い出さなかったか。しかじかのカルマクに言って，そなたの位階を上げなかったか。多くの出来事においてそなたに援助**【p. 185 / fol. 93a】**しなかったか。高い官職（uluġ manṣab）につけなかったか。国の全ての仕事をそなたに任せなかったか。そなたはまた我々に対し密かにたくらみ（qara sanap），我々の殺害を保証している。このそなたがしたことの罰を，そなた自身が述べよ」と言った。アシュール・コズ・ベグは頭を下にさげ，「このようなことをした者の罰は殺害である」と言った。それから，ホージャムはウラマーたちのほうを見て，「このようなことをした者の，聖法における罰は何である」〔と言った〕[137]。ウラマーたちは満場一致で，「このように背教者となった者の罰は殺害である」と返答した。〔ホージャムは〕，「そうであるな

133) ḫān yarlïġï。D126 は ḪAN YARLĠ と綴るが，Or. 9660, fol. 103b; Or. 9662, fol. 120a の ḪAN YARYĠY による。

134) D126; Or. 9660, fol. 103b; Or. 9662, fol. 120a は ḫōjā と記す。

135) ḫaṭṭ-i muhr-dār。D126 は ḫaṭṭ-i mamhūr-dār と記すが，Or. 9660, fol. 103b による。

136) sorun ḫāna もしくは sürün ḫāna。sorun，sürün の読みと語義について，本書【p. 47 / fol. 24a】「日本語訳注（2）」111 頁，注 139 を参照していただきたい。

137) dedilär。Or. 9660, fol. 104a による補遺。

らば，矢を雨のごとく浴びせよ」と命じた。

ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムが，「明日は金曜日である。全ての人びとが金曜礼拝に出てくる。絞首台に吊るして殺せばいい」と申し上げた。〔ホージャムは〕殺害を金曜に延期した。この〔ウラマーたちの〕一団が帰って，人がいなくなったのち，アブド・アッラー・ホージャムは再び次のように申し上げた。すなわち，「アシュール・コズ・ベグには，死にふさわしくない事由がある。というのは，この者を殺せば，それ以後，父の裏切りを息子は，兄の裏切りを弟は語らない。この者の死罪を息子のために赦すならば（munïŋ ölüm gunāhïnï oġlïġa ötsälär），聖戦の準備となるように，その家のなかにある財産を軍に〔取るよう〕命じるならば〔よいでしょう〕」。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下にとって，この上申は理にかなった。

【p. 186 / fol. 93b】翌朝，国の人びとがまた来て，殺害を急き立てた。ホージャム猊下は，「アシュール・コズの罪の赦しをスルターン〔・ホージャ〕[138] が私に求めた。私もそなたたちに〔赦しを〕求めている」と言って，殺害を押しとどめた。全てのアミールたち[139] は，「これほどの事において，一人，二人が死ななければ，国は治まらない」と言った。多くの者が急き立て，結局，バイ・フラトを，ホージャ・マースームを連れ出し，絞首台に吊るして殺した。国の人びとの心が一つにまとまった（sar jam‘ī boldï）。

物語の章。ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムについて聞かなければならない。

ニヤーズ・ベグの約束は実現せず（ornïġa tüšmäy），アシュール・コズ・ベグの約束もまたうまくいかず，この者たち〔ホージャ・ブルハーン・アッディーンの者ども〕はとてもうんざりしていた。毎日，城市に押し寄せ（šahrgä rīz[140] qïlïp），敗北を喫して帰ってきている。〔ヤルカンドの勇士たちが〕[141] 毎日，出ていって，死体で塚を築くほど戦っている。特に，かの名高い者たちのあいだにおける勇猛果敢なライオン（アリー）と斑の馬に乗った勇ましい英雄（ロスタム）の具現，すなわち，イナーヤト・ホージャム猊下[142] は，勇者ぶりにおいて無比であり，このかたについて外の〔ホージャ・ブルハーン・アッディーンの〕兵たちも嘆いていた。彼らはいつも，「もし，この斑の馬に乗った益荒男がいなかったならば，我々は城市を一日で

138) Ḫvāja。Or. 9660, fol. 104b による補遺。
139) umarālar。D126 は ‘MRALAR と綴るが，Or. 9660, fol. 104b; Or. 9662, fol. 120b の AMRALAR による。
140) D126 は ZYR と綴るが，Or. 9662, fol. 121a の RYZ による。
141) Yārkand dil- āvarlarï。Or. 9662, fol. 121a による補遺。
142) イナーヤト・ホージャムはホージャ・ジャハーンの娘婿である（本書【p. 159 / fol. 80a】「日本語訳注（6）」76 頁参照）。

取っていた。我々の全ての兵を，まさにこの斑の馬に乗った者がへりに追いやってしまった（qïr etip boldï）」と言って嘆いていた。

【p. 187 / fol. 94a】さて，数日がこのようにして過ぎた。しかし，不規則な天体の全ての不吉[143]がこの尊師さま〔イナーヤト・ホージャム〕の頭の上にあった。大きな不吉な星（土星）の日に，まさに戦闘においてあらゆる方面を攻撃し，タグリクたちを羊のごとく追い込んでいた。一人の離反者（rāfiḍī）が密かに待ち伏せして見張っており，〔イナーヤト・ホージャムに矢を〕放ち，右側の頭の骨を傷つけた[144]。これほどの傷にもかかわらず，〔イナーヤト・ホージャムは〕そのカーフィルに追いつき，一本の矢を放った。その胸に命中し，飛んで行き地面のなかに入って消えた。しかし，イナーヤト・ホージャムの頭脳に不具合が生じ，目の前が真っ暗になった。斑の馬の手綱をすぐに引き，戻らせた。斑の馬は城市のほうへ進んだ。門のところに連れ帰った。彼は支えられて国もと（waṭan）に運ばれた。三日目に[145]，永遠なる世へ旅立った。＜「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている＞〔『クルアーン』2-156〕。ホージャム・パーディシャー猊下をはじめ全ての王子たちは大いに哀悼して際限のない喜捨布施をし，礼拝してアルトゥン（Altun）[146]に埋葬した。

さて，ホージャム〔ホージャ・ジャハーン〕は次のように言った。すなわち，「この苦難，哀悼は子のホージャ・イナーヤトだけのものではない。我々皆のものである。我々の時代が完了すること（tamām bolmaq）の始まりは，まさにそれである。今やすぐに，我々のために喜捨布施をする者もおらず，哀悼する者もおらず，埋葬する者もいない時が来よう。今，我々自身の哀悼を我々自身がしよう。そして我々自身の喜捨を，**【p. 188 / fol. 94b】**我々自身が無事なときに，我々自身がしよう」と言って，ヤルカンドの人びとを現世において富裕にした。

さて，ホージャ・ブルハーン・アッディーンの兵はこの斑の馬に乗った益荒男から解放され，百千と喜んだ。毎日，ますます攻撃している。ヤルカンドの勇者たちが攻撃すれば，この者たちは持ちこたえられないで，仕方なく敗北を喫して戻っている。なぜならば，イスラームの軍には神の威厳がまさっているからである。〔ホージャ・ブルハーン・アッディーンの兵は〕毎日，〔その上にあがって，城壁にいる者たちを狙って射ようと〕[147]城壁の高さ，あるいは，それよ

143) nuḥūsat。D126 は NḪVST と綴るが，Or. 9660, fol. 105a; Or. 9662, fol. 121b の NḪVST による。
144) fïčaq fïčaq qïldï。fïčaq (<FJQ) を pïčaq（ナイフ，短刀）の訛音とみなし，比喩的な表現と考えた。なお，Or. 9662, fol. 121b は FJYQ FJYQ，Or. 9660, fol. 105a は PARH PARH と綴る。後者によれば，「ばらばらにした」（pāra pāra qïldï）となる。
145) üčünči küni。D126 は üčünči とのみ記すが，Or. 9660, fol. 105b; Or. 9662, fol. 122a による。
146) アルトゥンはヤルカンドの著名な墓地の名である。
147) tā-ki üzäsigä čïqïp säfildäkilärni nišānalap atqay。Or. 9662, fol. 122b による補遺。

り高い・・・を作っている[148]。翌朝〔になると〕，ヤルカンドの勇者たちが石油[149]の・・・[150]で火を点ける。どれほど減じている〔だろうか〕，木やこっぱが一時間で燃えて灰になっている。いくらかの素早い者たちは逃げて避難している。この事の多くはカバグ･アトク門（Qabāġ-ātqū Darvāzasï）[151]において知られている。この方面の門（bu wajhī darvāza）はホージャ･アブド･アッラー・ホージャム猊下の集結地点（陣地）[152]であった。幾ばくかの間，このようにして時を過ごした。しかし，ホージャ・ブルハーン・アッディーン・アズィーズの兵はとても期待[153]していて，失望をあらわにした。

さて，ガーズィー・ベグの部下（kiši）がサーリフ・ハリーファとともに使者に出て，ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムの書状を持ち帰っていた日に，ガーズィー・ベグはその書状のことを聞き，不誠実の血管が脈打ちはじめ，王子たちから心を断ち切り，ホージャ・ブルハーン・アッディーン**【p. 189 / fol. 95a】**の側に心を寄せた。ハーナカーフ門（Ḫānaqāh[154] Darvāzasï）[155]からマスハラ門（Masḫara Darvāzasï）[156]のあいだは，この者〔ガーズィー・ベグ〕の陣地（mulčar）であった。割り当ての命令が執行されていた。時どき城壁から，時どき門から間諜が出ていっていた。時どき外から[157]間諜が入ってきていた。ハーキム職〔を与えるという〕約束によりクルアーンの誓いをしあっていた。

このようにして，いくらかの期間が過ぎた。この秘密の暴露を，全ての王子たち，オルダの貴人（uluġ）たちがすっかり聞き，ホージャム猊下の祝福された耳にいれた。次のように言った。すなわち，「このガーズィー・ベグはとても悪賢い。策略，裏切りを試みた。この者の裏切りに疑いはない。その策略は幾度も繰り返された。我々がこの者を捕えて獄に投じれば，皆の心は和らぐ。もし，我々が彼を捕えなければ，我々に対して事を構える。あとで悔やんでも

---

148) D126 は ŠYBH qïla durlar, Or. 9660, fol. 106a; Or. 9662, fol. 122b は ŠBH qïla durlar / dur と記す。ŠYBH / ŠBH の読みと意味は不明であるが，文脈からすれば，攻城のための木製の構築物であろう。

149) naft。D126 は NF と綴るが，Or. 9660, fol. 106a; Or. 9662, fol. 122b の NFT による。

150) QARH’。読みと意味を解し得ない。

151) ヤルカンド城市の北東の門。本書【p. 103 / fol. 52a】「日本語訳注（4）」102 頁，注 149 参照。

152) mulčar (MLJR)。mulčar について，間野英二『バーブル･ナーマの研究 III』京都：松香堂，1998 年，382 頁，注 1117 及び 533 頁等の訳文を参照。

153) intiẓār。D126 の綴りは乱れており，Or. 9660, fol. 106b; Or. 9662, fol. 123a の ANTẒAR による。

154) D126 は ḪANQA，Or. 9662, fol. 123a は ḪANH QH と綴るが，Or. 9660, fol. 106b の ḪANQAH による。

155) ヤルカンド城市の南の城門。堀直「回疆都市ヤールカンド――景観的復原の試み――」『甲南大学紀要 文学編』63，社会科学特集，1987 年，40-41，49 頁参照。

156) ヤルカンド城市の東側の城門。本書【p. 162 / fol. 81b】「日本語訳注（6）」79 頁，注 173 参照。

157) tašqarïdïn。D126 は TAŠQARTYNと綴るが，Or. 9660, fol. 106b; Or. 9662, fol. 123a の TAŠQARYDYN による。

益はない」と上申した。ホージャム猊下は次のように言った。すなわち，「おお，子たちよ，そなたたちは冷酷と裏切りについて語っている。私は運命（taqdīr）について語っている。そなたたちは瞑想の神秘階梯（maqām-i tafakkur）にある。私は神への信頼の神秘階梯（maqām-i tawakkul）にある。

対句
このような希望により心は安らがないことになった
満足を言うことに私は踏み込んだ。私の心を安らがせた

そなたたちの言葉は正しい。私は幾たびかガーズィーと『クルアーン』を仲介にした。その誓約を，彼が守らないとしても，**【p. 190 / fol. 95b】**私は守らねばならない。そしてまた，事のあいだに事がある。小生は永遠の運命を見なければならない。方策の試みによって事が完遂していたのではない」と言って，王子たちを押しとどめた。

しかし，ガーズィー・ベグが間諜を出して城市のなかの秘密を知らせないで夜は明けなかった。時々あちらから斥候が入ってきて，言葉を得て出ていく。あらゆる所で，城壁に隙間[158]があるならば，損傷することのできる所があるならば，〔そのことを〕話して出て行かせていた。このようにして数日経った。〔しかし〕それらにいかなる損害も与えることはできなかった。いかなる策略でも城市をこわすことはできなかった。

ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム猊下はガーズィー・ベグのもとに人を入れて，「我々はとてもうんざりした[159]。あるやり方で城市をこわして与えるならば，我々が勝利を得て城市を取るならば，我々が〔カルマクの〕王（törä）に話して，ガーズィー・ベグに，より多くの報償をもらい与えるならば」と言って懇願した。ガーズィー・ベグは，「明日，その返答をして出させよう」と言って，間諜に退去の許可を与えた。彼自身は策略により城市をこわすことを考えた。勧告は次のように定まった。すなわち，ヤルカンドの兵を集め，連れ出て，彼自身が逃げ去り，全ての兵を抑え込む（basruq qīlġay）。イスラームの軍に相当な損失となり，まさにこの混乱のときに城市をこわしてしまう。即座にガーズィー・ベグはホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下の御前に行き，**【p. 191 / fol. 96a】**次のように上申した。「おお，世界の帝王よ，我々はいつまで，このように閉じ込められているのか。結局，城市のなかにいるムスリムたちは窮してしまう。ある者たちは飢えて乗用動物を殺して食べる。大多数の人びとに無力感が生

158) kāvāk。D126 は KVAK と綴るが，Or. 9660, fol. 107a の KAVAK による。
159) malāl bolduq。D126 は malāl を MALAL と綴るが，Or. 9660, fol. 107b; Or. 9662, fol. 124a の MLAL による。

じ，大望勇気が減じる。それよりも良いのは次のとおり。すなわち，七十歳から十二歳までの者を軍に入れて，出ていき一挙に攻撃するならば，ホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍は一度に崩壊してしまう。このようにして勝利する」と上申した。〔それは〕ホージャ・ジャハーン･ホージャム猊下にとって好ましく思われた。〔ホージャム猊下は〕次のように命令した。すなわち，「ムスリムたちは軍の準備をするように。そなたたちは死ねば殉教者，殺せば聖戦士。そなたたちはこの戦いから逃げるならば，偽善者，背教者〔となり〕[160]，〔我が〕怒りに値することになる」と言って布告させた。この夜，〔戦いの〕[161] 太鼓を次のように打ちひびかせた。すなわち，イスカンダルの大太鼓。ジャムシードのラッパ[162]，フーシャング[163] の貝の角笛（safīd-muhra），カイ･ホスロー王のチャルメラ（sūrnāy）を〔打ち鳴らして〕巡回させた[164]。その勇敢な者たちは戦いの武器を手にした。その臆病な者たちは逃げることを考えた。

さて，不幸なガーズィー・ベグは間諜を外に出して，「私は明日，城市に人を置かないで，私自身が先頭に立って出る。〔両軍が〕[165] 一，二度，戦場でまみえたのち（bir iki maydān alïšqandïn soŋ），私は右〔翼〕から左〔翼〕へ向かうことにする。〔私の方面に皆が向かい，攻撃して馬駆けさせよ〕[166]。私はそれから後退して逃げる。その後，**【p. 192 / fol. 96b】**彼ら自身が，人を殺すことを〔よく〕[167]知る。城市のなかでの策は，私がする。私の[168]務めを彼ら自身が〔よく〕[169] 知る」と言って，書状を送った。城市のなかでは，この夜，父が息子に，兄が弟に別れを告げあい，皆の勇気大望は減じていた。なぜならば，ガーズィーの裏切りを，全ての人が聞いていたからである。

要するに，白昼となった。皆は武具を自身にしっかりとつけ[170]，完璧に武装して，門から出ようとしていた。幾人かの勘定する者（ahl-i ḥisāb）は，ヤルカンド軍を四万に近いと推定した。軍が敗北を喫して後退するまで，門から軍が出ることは避けられなかった。ホージャ・ブ

---

160) bolup。Or. 9660, fol. 108a; Or. 9662, fol. 124b による補遺。

161) jang。Or. 9660, fol. 108a; Or. 9662, fol. 124b による補遺。

162) karnay < karnāy。D126 は KAY NARと綴るが，Or. 9660, fol. 108a; Or. 9662, fol. 124b の KARNAY による。

163) フーシャングはイランの民族叙事詩『シャー・ナーメ』における神話時代（ピーシュダーディー朝）の第 2 代の王。

164) gardišġa kigürdilär。gardiš を，D126; Or. 9660, fol. 108a; Or. 9662, fol. 124b は KRDYŠ と綴る。

165) iki laškar。Or. 9660, fol. 108b による補遺。

166) Meniŋ ṭarafımgä hama yüzlänip hujūm äyläp aṭ salsunlar。Or. 9660, fol. 108b; Cf. Or. 9662, fol. 124b-125a による補遺。

167) ḫūb。Or. 9660, fol. 108b による補遺。

168) meniŋ。D126 は MNM と綴るが，Or. 9660, fol. 108b; Or. 9662, fol. 125a の MNYNK による。

169) ḫūb。Or. 9660, fol. 108b による補遺。

170) ustuvār äyläp。ustuvār を，D126; Or. 9660, fol. 108b; Or. 9662, fol. 125a は AVSTVAR と綴る。

ルハーン・アッディーンの軍もやってきて，戦列を整えた。クチャー，アクス，ウシュ，カシュガル，クルグズ，タグリク〔の兵〕からなり[171]，ヤルカンド軍の前において，大河の支流，日光の粒子はなかった[172]。要するに，両軍は互いに対峙して，戦列をチェスの列のように整えた。名高い巧みな乗馬者たちが無用の戦場に（maydān-i hijāġa）馬を駆って走りまわり，時どき右翼に[173]〔時どき〕[174]左翼に騒動を生じさせていた（qozġalan salur edilär）。しかし，ガーズィー・ベグは押しとどめて，射ることを許さないでいた。しかしながら，それとともに，ホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍を数ファルサング後退させた。死体で塚を築くような事態に近づいた。激しく攻撃すれば，**【p. 193 / fol. 97a】**埃を天にまきあげ，塵をまき散らすであろう。ホージャ・ブルハーン・アッディーンはこの軍の多さを見て，心から望みを全く絶っていた。一歩も前に進む勇気は誰にもなかった。呪うべきクバード[175]は自分の者たちとともにへりに避け，見物していた。

さて，ガーズィー・ベグは右〔翼〕から左〔翼〕へ軍に銅鑼を打たせて[176]進んでいた。まさにこの状況において，ホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍から五百人がガーズィー・ベグのほうへ馬を駆けさせた。ガーズィーは好機とみなして，旗幟をたたんで逃げ始めた。背後からクルグズたちが馬を駆けさせた。ヤルカンド軍は驚き，あわてふためいた。仕方なく逃げ始めた。まるで天が押さえつけられたようになり，クルグズたちが突っ込んできたので，死体が川床の石のように横たわった。血が水路になって流れた。人が死ぬことの限度は少しもなかった。逃げた者たちは門から入り込めないでいる。次々と人を襲い殺している。あとに残った者たちを突き殺している。若干の者たちを城壁からロープで引き上げている。

さて，ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムは城壁の上で城市の見張りをして，軍の武器を整え出していた。この出来事を見て，手で膝に触れ，軍を戻らせるために次のようにした。**【p. 194 / fol. 97b】**門から出る状況ではなかった。押し合いへしあいしている。仕方なく，城壁からロープで〔降り〕[177]，自身の家僕（ḫādim）トゥーカール・ミールザー，ホージャム・ヤー

171) Or. 9660, fol. 108b-109a は，「クチャー，アクス，ウシュ，カシュガル，アルトゥシュ，イェンギ・ヒサール，カルマク，クルグズ，タグリク，中国人からなり」（Kūčār Āqsū Ūš Kāšqar Artūš Yeŋī-Ḥiṣār Qālmāq Qïrġïz Taġlïq Ḫïṭāy bolup）と記す。

172) ホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍は一糸乱れずに統一されているという比喩の表現であろうか。

173) maymanagä。D126 は「右翼を」（maymanani）と記すが，Or. 9662, fol. 126a による。

174) gāhī。Or. 9662, fol. 126a による補遺。

175) アンディジャンのクルグズの首領，クバード・ミールザーである。本書【p. 116 / fol. 58b】「日本語訳注（5）」28 頁参照。

176) laškarni jangdaġan bolup。jangdaġan を，D126 は JANK ĠAN と綴るが，Or. 9660, fol. 109b の JANKDAĠAN による。jangda- を，jang（銅鑼）に動詞化の接字 -da- がついたものと解した。

177) tüšüp。Or. 9660, fol. 110a; Or. 9662, fol. 126b による補遺。

ル（Ḫōjam Yār），幾人かの者たちとともに各自，馬に乗らせ，数回軍を押しとどめて戻らせた。あちら側から追い立て，殺して来ている。この逃げる人びとには，うしろを振り向く力がない。どのようにしても駄目だった。仕方なく，また城壁に戻った。門から入った人は無事だった。それ以外の者は死んだ。それまでに日が暮れていた。門を固めた。夜が明けるまで死者の衣服を，そして武器を奪うことで敵たちは喜び，嬉々として安らいだ。

要するに，城市〔のなか〕[178]は，哀悼，苦難に満ちた。ある者は「我が父〔を亡くした〕」と言い，ある者は「我が子」と言い，ある者は「我が兄」と言う。誰も苦難をまぬがれない。ガーズィーはまさに逃げて〔城市に〕入るや，自分の屋敷に閉じこもり，オルダに行かなかった。翌朝まで行かなかった。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下をはじめ全ての王子たち，オルダの属人たちが集まり，「今や，救済策は何であるか」と相談した。

詩
私には行くのに力も，留まるのに力もない
捕らわれの心よ，そなたは我々をこの辛苦に投げ入れた

結局，方策は定まらず，皆に動揺が生じた。ガーズィーを呼びに[179]幾人かを遣わした。彼は来るのに同意しない。**【p. 195 / fol. 98a】**このようにして，その日[180]は過ぎた。翌朝，再び呼びに人が行った。「今，私は行く」と言う。〔しかし〕来ないでいる。その様子がだんだんと変わってきている。ホージャム猊下はウマル・バーキー・アーホン[181]を呼んで来させ，次のように言った。すなわち，「おお，アーホンよ，そなたが行き，ガーズィー・ベグを連れてくるように。〔ガーズィー・ベグよ，そなたが〕来ないでいる理由は何であるのか。我々は我々各自に関して『クルアーン』の誓いを仲介にしてきている。我々に貢献するために助言するならば，我々は城市のなかにいることがよいのか，それとも，城市を捨てて避難するのがよいのか。我々が出て行くならば，どちらの方向がよいのか。我々は何年も，言葉の義務，食物の義務を負っていた。我々に誠実でない世は，そなたにも誠実ではない」と言って，アーホンを出立させた。アーホンはガーズィー・ベグのもとに行き，あらゆる面で言葉を発して，かなり忠告した。

---

178) iči。Or. 9660, fol. 110a; Or. 9662, fol. 127a による補遺。
179) čïrlaġalï。D126 は ČARLAĠALY（čarlaġalï「偵察しに」）と記すが，Or. 9660, fol. 110b; Or. 9662, fol. 127a の ČRLAĠALY による。なお，すぐあとの行で，D126 は ČRLAĠALY と綴る。
180) bu kün。D126 は「数日」（nečä kün）と記すが，Or. 9660, fol. 110b; Or. 9662, fol. 127b による。
181) ヤルカンドのアーラム（a‘lam, 最上位の学者）である（本書【p. 111 / fol. 56a】「日本語訳注（5）」24 頁，前述の【p. 166 / fol. 83b】）。

結局，ガーズィーは，「私は行かないでいる。私は，我が王子たちを恐れている。いろんな不安な言葉が耳に入った。私の心が平静になってから，私は行く」と返答した。アーホンは〔帰って〕来て，事情を説明した。それまでに，鉄砲撃ちたちを追いたて[182]，ガーズィーの屋敷に連れて入っている。オルダの人びとに会えば，別のように，ちがうように様子を示している。この出来事を見た家僕たちが行って話している。王子たちはガーズィー・ベグに関してホージャム猊下に非難の言葉を〔述べ〕，捕えないことを，獄に投じないことを非難**【p. 196 / fol. 98b】**している。ホージャム・パーディシャー猊下は次のように言っている。

「詩
このような願望をもって，心が安らがないままであった
満足を言うために足を踏み入れた。私の心を安らがせた
ファルハード[183]とマジュヌーン[184]は私の墓のそばで[185]戒めた
狂気の荒野において，私はそれらの石を・・・[186]打った

かの塩の不法な者[187]，ガーズィーを，私は，仲介にした『クルアーン』に，偉大な我が父祖にまかせた。ガーズィーがまさにこの地域（diyār）において一年〔もしくは半年〕[188]確乎としていたことを，私は認めたい（köräy）。我々を燃やす火は，そなたをさらにひどく燃やす。

詩
まだ，その第一は愛である。服喪の涙をめったに流すな
その暴風は恥辱である。世界征服者がおこなっていた」

〔ホージャム猊下は〕アーホンに退去の許可を与え，〔アーホンは〕家に戻った。その夜，王

182) ḥaydap。D126 は ḤYDB，Or. 9660, fol. 111a は ḤYDAB，Or. 9662, fol. 128a は ḤYDYB と綴る。
183) ファルハードはニザーミーの叙事詩「ホスローとシーリーン」などの登場人物で，美女のシーリーンをめぐりホスローの恋がたきとなるが，失望して自殺する。訳書として，ニザーミー著，岡田恵美子訳『ホスローとシーリーン』東京：平凡社，1977 年がある。
184) マジュヌーンはニザーミーの叙事詩「ライラとマジュヌーン」などで描かれる，美女のライラに恋して狂人（マジュヌーン）になった青年カイスのこと。訳書として，ニザーミー著，岡田恵美子訳『ライラとマジュヌーン』東京：平凡社，1981 年がある。
185) bašïda。D126 は TAŠYDA と綴るが，Or. 9660, fol. 111b; Or. 9662, fol. 128a の BAŠYDA による。
186) D126 は KVKSMH，Or. 9660, fol. 111b; Or. 9662, fol. 128a は KVKSVMH と綴る。読みと意味を解し得ない。
187) tuz ḥarāmï。塩（恩恵）を施した人に忠誠を尽くさない者ということであろう。
188) yā yerim yïl。Or. 9660, fol. 111b; Cf. Or. 9662, fol. 128b による補遺。

子たちがオルダの属人たちとともに数回集まり，また陣地に戻って行った。ある者たちは，我々が城市に留まることはよいと言った。ある者たちは，我々が避難することはよいと言った。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム〔とともに〕[189] シハーブ・アッディーン・ブカーウルは，「我々がガーズィーをその屋敷に閉じ込め，捕えて殺すならば，敵たちは失望して戻る。また，城市を強固にすることができる」と言って，この得策を認めなかった。

結局，得策は次のように定まった。すなわち，「今，我々が夜を徹して進むならば，河を渡り，**【p. 197 / fol. 99a】**しかじかの山のなかにある洞窟に入れば〔よかろう〕。出入り口は一つ[190] である。そのなかは広大な夏営地である。草，水がなかにある。数年滞在しても，窮しない。一人の者が鉄砲一つを持って出入り口に坐っているならば，敵は百，千であっても，決して近づくことはできない。敵たちが気づいて，我々の足下に[191] おちいるまで，我々自身は洞窟にいよう」と互いに命じた。運命宿命がどれであるのか知らなかった。

まさにこの相談どおりに行動し，避難することに取り掛かった。ある者たちは気づいた。そして，ある者たちの父が気づけば，その息子は気づかない。ある者たちが馬に乗れば，ある者たちは駱駝に乗り，また，ある者たちの馬がいなければ，二人乗りする。彼らに武器もなく，食料もない。城市から荒野に出ているように，まさにこのみすぼらしさ[192] でマスハラ門（Masḫara Darvāzasï）・・・[193] から出て，カルガリクへの道に入った。途上においてクルグズたちがさえぎり留まっていたらしい。まさにこの混乱状態において道からはずれ[194]，雑木林[195] に入った。夜は天と同等の雑木林である[196]。父に息子とのかかわりはなく，兄に弟とのかかわりはなく，夫（er）はその男らしさ（eränllik）を知らず，妻（maẓlūm）はその女らしさ（maẓlūmlïġ）を知らないような速度で進んだ。まるで最後の審判の〔日の〕荒野よりもきつく，望んだ**【p.**

189) birlä。Or. 9660, fol. 111b; Or. 9662, fol. 128b による補遺。

190) bir。D126 は BAR と綴るが，Or. 9660, fol. 112a; Or. 9662, fol. 129a の BR による。

191) payimizgä。D126 は FSYMZĞH，Or. 9660, fol. 112a は QṢDYMZKH と綴るが，Or. 9662, fol. 129a の PYY MYZKA による。

192) kam-kāsalïq。D126; Or. 9660, fol. 112a; Or. 9662, fol. 129a は KM KASLIQ / KM KAS LIQ と綴るが，KM KASHLIQ / KM KASH LIQ 誤記とみなした。

193) D126 のみが DYDARY QVRĠV と記し，Or. 9660, fol. 112a; Or. 9662, fol. 129a にはない。「その外見が恐怖」（dīdārï qorġu）と強いて読むこともできるが，文脈にそぐわない。城門に付属する設備を指しているのであろうか。

194) D126; Or. 9660, fol. 112b は TAŠKARQAB，Or. 9662, fol. 129b は TAŠYR QAB と記す。tašqarï（「そと」）から派生した動詞と思われる。

195) jangal / čangal。D126 は ČNKAL，Or. 9660, fol. 112b は JNKAL，Or. 9662, fol. 129b は JANKAL と綴る。以下，この語の綴りの異同について注記しない。

196) 夜間，雑木林のなかは暗闇であるという意味であろうか。

198 / fol. 99b】所を通過できないでいる。それぞれの雑木林はひどく大便で汚れ，迷いやすい[197]。毒木[198]〔がある〕。〔毒木を〕一つ抜けると，また一つ。それを抜けると，また一つ。百ほど多くある。一つ一つが入り込んでおり，突破して抜けることができない。千の苦労をして抜ければ，また一つある。それ故，ある者たちの衣服は裂け，ある者たちの祝福された身体は引き裂かれる。

彼らはこのような困難にもかかわらず，ザラフシャーン河（daryā-yi Zarafšān）[199]に出た。この河の岸に沿って進んだ。いくつかの所で，彼らの前に河が合流している。河の特質は雑木林よりも悪い。中央の氷は今しがた張ったばかりである。両岸の氷は固く，いくつかの所の[200]高さ[201]は人の身長。いくつかの所では家のように，馬のように〔なっている〕。氷玉が出来ている（qardu kelä dur）。乗用動物に〔当たり〕[202]ぼろぼろにしている。その上にいる人は水に飛び込んでいる。ある者たちの馬は河に氷から飛び跳ねて[203]落ちるまで，その尻がい[204]が切れ，顔が下にさがっている。ある者たちの馬は河から飛び跳ねて[205]あがるまで，その腹帯が切れ，うしろに倒れている。武具〔もろとも〕[206]水にひとたび落ちたのち，再び騎乗するのは不可能である。凍えたままである。このように難儀して，カラ・ヤンタク[207]の向かい（toġra）であったが，河を渡り始めた。それまでに，クルグズたちは情報を得て，待ち伏せに入った。**【p. 199 / fol. 100a】**決して容赦しないでいる。誰かあとに残ったり，へりに出るならば，クルグズ

---

197) Har bir jangal eŋ čïčġan (<JJĠAN) azġan。

198) D126 は QVNK DVĠVTKN，Or. 9660, fol. 112b は QVNKRAĠVTYKN，Or. 9662, fol. 129b は QVNKRVĠVTKAN と綴る。『五体清文鑑』に「QVNKRAĠVTYKAN，毒木」とあり，『五體清文鑑譯解』は「樹名。木質黄色で密。実は紅いがあたるので食えない。弩弓，矢柄を削る器また矢柄などに造る」の釈義を載せ，kongra u tik'an と転写する（『五体清文鑑』III，民族出版社，1957 年，4044 頁，田村實造，今西春秋，佐藤長（編纂）『五體清文鑑譯解』上巻，862-863 頁，No. 15201）。

199) ヤルカンド・オアシスを形成する主要な河。

200) yerlärniŋ。D126 は YRDYNK と綴るが，Or. 9660, fol. 113a の YRLARNYNK による。

201) igizlik。D126 は AKRLY(/N)K と綴るが，Or. 9660, fol. 113a の AYKZLYK または Or. 9662, fol. 130a の AYKYZLYK による。

202) tegsä。Or. 9660, fol. 113a; Or. 9662, fol. 130a による補遺。

203) säkräp。D126 は SKRTYB と綴るが，Or. 9660, fol. 113a; Or. 9662, fol. 130a の SKRYB による。

204) qurušqun。D126 は QVAVŠ QAN と綴るが，Or. 9660, fol. 113a の QVRVŠQVN による。

205) säkräp。D126 は SKRTYB と綴るが，Or. 9660, fol. 113a; Or. 9662, fol. 130a の SKRYB による。

206) birlä。Or. 9660, fol. 113a; Or. 9662, fol. 130a による補遺。

207) Qara-yantaq (<QRAYAN TAQ (D126); QRA YANTAQ (Or. 9660, fol. 113a; Or. 9662, fol. 130a))。ヤルカンド・オアシスの南端，ヤルカンド河（ザラフシャーン河）上流左岸の村。新疆維吾爾自治区測絵局編成『新疆維吾爾自治区地図集』北京：中国地図出版社，2004 年，194-195 頁の地図では「喀拉央塔克」と表記されている。『中華人民共和国新疆維吾爾自治区地図集』ウイグル語版，1966 年，145-146 頁の地図，阿不都熱西提・沙比提，吐爾迪・納斯爾『漢維新疆地名詞典』烏魯木斉：新疆人民出版社，1994 年，207-208 頁参照。なお，yantaq は，砂漠に生育する刺のある草木の名である。

たちは略奪している。抗弁[208]すれば，殺害している。河から出れば，雑木林の苦難。雑木林から出れば，河の苦痛。最もきついのは，クルグズ，咽喉のない者[209]の厄介。

詩
酌人よ，私に1杯の酒の酔い[210]をもたらせ
　天は圧制と抑圧から，いかほどすくい取ったか
私は過ぎ去った時間について大いに不平を言おう
　尊師たちの過去について[211]物語〔をしよう〕
どんな事を王子たちにもたらし
　全ての悲哀[212]は気高い身体に
この者たちに生じた事は誰に生じた
　どのカーフィルがムスリムたちにした
悪い描写を説明でやりとげない
　何のようにと言えばよいのだろう，おお，人々よ
敵の群衆に容赦を求め
　尊師や一門の者たちは逃げて
無の荒野に避難した
　国と家を捨て，不吉な歩みに
全ての災難の荒野は雑木林と言われる
　ライオンの雑木林はどんな雑木林であったのか
棘の多い木は刃針のごとし
　あれほど鋭い[213]短刀を四肢にふるう
大河の描写において作文しよう
　言葉は多いが，すべて暗示
この時に逆であることを見よ
　良いことは悪いことと異ならない
昔，ファラオの者たちを溺れさせた

---

208) ḥujjat。D126 は HJT と綴るが，Or. 9660, fol. 113a; Or. 9662, fol. 130a の ḤJT による。
209) tamġaqsīz。クルグズを悪く言う比喩と思われる。
210) nišā。D126 は NŠAH と綴るが，Or. 9660, fol. 113a の NŠA による。
211) ʻazīzlarnīŋ guẕaštadīn。D126 は ʻazīz sar- guẕaštadīn と記すが，Or. 9660, fol. 113b による。
212) ġam-nāk。D126; Or. 9660, fol. 113b は NAZVK と綴るが, Or. 9662, fol. 130b の ĠMNAK による。
213) tīz。D126 は TYR と綴るが，Or. 9662, fol. 130b の TYZ による。

　モーセの者たち[214] を無事に渡らせた
そして今，モーセの者たちを溺れさせる
　ファラオの者たちを無事に渡らせる
誠実な者（サーディク）よ，すくい取れ，簡潔にせよ
　どんな時にも，これらの事は定まっている
もしそなたが運命について百の不平をいうならば
　それに限度がないように終わらない

〔以下，日本語訳注（8）に続く〕

214) mūsawīlar。D126 は MVSAVYLAR，Or. 9660, fol. 113b は MVSYVYLAR と綴る。以下，この語の綴りの異同について注記しない。